小野寺規夫先生の思い出

古井明男

1　弁護士会館の起工式

小野寺先生は、平成六年一〇月の山梨県弁護士会館起工式の時甲府地方家庭裁判所の所長で、その前年春甲府に赴任されました。起工式の担当副会長であったことから私との交流もこの時が最初でした。ひまわり事務所の共同経営者である村松晃が弁護士会長の時に赴任され「今度の所長は気さくでなかなか人物だ」とその人となりを随分聞かされていました。

それまで裁判所と弁護士会は巧くいっていたのですが、その前任の某所長と諍いがあり気まずい関係となっていました。その原因がまさに会館問題でした。弁護士会活動が司法改革の動きに連動して、当番弁護士活動や法律相談業務も活発に行われ、その際のチラシに弁護士会の所在を「甲府地方裁判所構内」と表示したことを当時の某所長が見とがめ抗議をして来たことが発端でした。

小野寺先生は、弁護士会との融和のために赴任してきたと公言していました。前任所長との諍いから弁護士会内では会館建設の機運が急速に高まり、長年の夢であった会館が、現在地の鰻割烹店が閉店という機会にも恵まれ土地の手配がつき平成七年会館竣工になりました。関係修復だけでなく会館建設まで行ったのは、小野寺先生の強い

運気に影響されたものと不思議な縁を感じます。

2　自然科学研究会

小野寺所長のおかげで、関係修復はもとより交流が以前に増して活発となり検察庁も含めた法曹三者の交流が盛んとなりました。以前赴任地の新潟では「ブタ会」があった、沖縄ではこうだったと色々情報を頂き、所長時に音頭を取って頂き自ら命名した「自然科学研究会」を行いました。これも副会長であった私に協力要請があり、二人で計画立案して実現したもので、法曹三者計約三〇名が貸し切りバスで中央道の笹子トンネルの換気装置を見学し勝沼のワイナリーでバーベキューを楽しみ、裁判所外で私服で楽しい一時を過ごし法曹三者の交流の実を大いに上げた自然科学研究会でした。その後実現されないのが残念で堪りません。

3　判例実務研究会

所長の後、東京高裁に赴任され退官され平成一〇年四月山梨学院大の教授として山梨に戻ってこられ、また交流が再開しました。

山梨学院大学の講義に「司法実務」が出来たり、弁護士が授業に行く回数が増えたりと小野寺先生の労で山梨学院大学と弁護士会の交流が盛んになってきました。その中の一番が「山梨判例実務研究会」で裁判所の所長以下の裁判官と大学の教授陣と弁護士会の有志での判例研究会の開催です。二、三ヵ月に一度の割で大学を会場に二〇乃至三〇名規模で開催し、懇親会も行われ楽しく行われました。これも小野寺先生が音頭を取ったから出来たもので

した。法科大学院が設立されるまで続いた研究会でした。

平成一二年一二月、中国上海市の復旦大学で「東アジアにおける民商法を中心とする法体系の整備の現状と課題」をテーマにした国際シンポジウムも、復旦大学と山梨学院大学の共催で行われました。日本から大学教授・判事・弁護士からなる約二〇名と復旦大学関係者と実務家計三〇名ほどが発表する大規模なシンポジウムでした。このシンポジウムも小野寺先生の人脈によって参加者のメンバーが多種多彩になり大成功を収めました。

この時に法科大学院の設置の話で毎晩大いに盛り上がり、平成一六年に当法科大学院開校の大きなうねりになったことはこのシンポジウムの副産物でした。

4　法科大学院の開校

法科大学院の開校は小野寺先生がいなければなかった、実現できなかったことと思われます。勿論大学の経営陣の理解や協力がなければ出来なかったことですが、ソフトの面では小野寺先生なくば実現出来なかったことです。それ程開校にも開校後の成功も小野寺研究科長抜きでは語ることは出来ないほど大きな存在でした。

法科大学院の成功は、「地方私学の雄」を目指す本校の文武両道の文の面での貢献は大きく正に小野寺先生の偉業です。

法科大学院開校については、山梨県弁護士会が大学と協定を締結し、開校に向けてまた今も全面協力をしています。これも小野寺先生の存在とそれまでに裁判官や大学人として弁護士と分け隔てなく胸襟を開いて付き合ってきたことや交流の成果があったらばこそと思います。

特色ある実務科目の内容や法科大学院法律事務所・ローヤリングの合宿も小野寺研究科長の理解と後押しで実現したものです。

5　人垂らし

小野寺先生は良く人の面倒を見る方であり、人が大好きな方でその付き合いを大切にする方でした。あの笑顔で「これやらない」「協力してよ」と誘われると私は断ることが出来ませんでした。

私の健康を気遣ってくれる一方で新潟から毎年美味しい酒と鰤寿司が送られて来ました。

「人垂らし」人を引きつけて離さない魅力溢れる人柄で、人を飽きさせず、一緒に何かしたいと思わせる方で、一緒にいると必ず良い方向へ進む運気のある方でした。

「和して同せず」信念を持って人に接した方で、多くの方々に尊敬されていた方でした。そんな小野寺先生に目をかけて頂きお付き合いをさせて頂いたことは、私にとって生涯の幸福でした、ありがとうございました。

癌と闘いながら最後まで次何をやるかを考え、まるで自分は不死身と思っていたかのようでした。楽天家だった小野寺先生、安らかにお休み下さい。そして我々をお導き下さい。

以上。